ジャズライフ掲載時の解説

もうここまで来ると、有名とか何とかというレベルではないですね。ジャズという音楽を代表する曲のひとつとも言えます。当然、そんな曲ですからセッションでも頻繁に取り上げられる曲ですが、だからといって簡単だということでないですね。いや、有名なだけにメロディがあまりに印象的で、その分ソロは難しいとも言えます。さあ、ではどう料理しましょうか？

この曲のポイントはなんといっても、Aセクションの3・4小節目に現れるD7ではないかと思います。このコードの解釈には二通りの考え方があると思います。まずその1は、その先の6小節目にあるG7へのセカンダリードミナントです。セカンダリードミナントが何かについては、ポピュラー音楽に関するいろんな理論書が出ていますし、あるいはネットで検索しても簡単に見つけられると思いますので、もし知らないというかたは是非確認しておいてください。この曲のキー・Cにおける本来のドミナントコード・G7に対するセカンダリードミナントなので、このD7のことをダブル・ドミナントと呼んだりもします。それに対してもうひとつの解釈を挙げておきましょう。このD7が2小節もの長きにわたって響いていることから、このD7は、その先のG7とリンクしているのではなく、ひとつのコードとして独立して存在しているのではないかと考えてもいいと思います。他の例で言えば、これまたセッションでよく演奏される、ジャコ・パストリアスの演奏で有名な「The Chiken」という曲の、9〜11小節目に現れるC7です。このように、どこに解決するわけでもなく、単独で存在しうる7thタイプのコードのことをスペシャル・ファンクション・ドミナントと呼びます。これ、実は結構、いろんな曲に出てくるんですよね。ブルースのⅠ7やⅣ7もそうですし、あるいはセロニアス・モンクの曲なんかにも多いですね。まあ、それはさておき、このD7は単独で存在しているドミナント・コードだと考えることもできるわけです。いずれの場合も、このコードのスケールは一般的にはミクソ・リディアンでいいと思うのですが、この曲の場合は、この部分でのメロディが「G#」の音になっているので、ホール・トーン・スケールが当てはまります。全ての音の間隔が全音となっているスケールですね。ということで、今回、ソロを作るに当たって、この部分では全て、そのホールトーンを意識して作ってみました。実際、このホールトーン・スケールが曲中でぴったりあてはまるというのは、数あるスタンダ–ドのなかでも、この曲くらいかも知れません。もちろん、他の曲のドミナント7thコードの時にも、どんどんそのスケールを使うことは可能です。このスケールは、全て音が全音の間隔でできているという特異性から、27・28小節目のソロにあるような、システマティックなフレーズを作ることができるので、色々なフレーズを研究してみると面白いかも知れませんね。この曲は、メロディ譜に取り上げた、イントロや2ndリフの部分にもこのホールトーンスケールが重要な要素となっています。デューク・エリントンが、「ホールトーンスケールを使って何か曲を書いてやろう！」と試みてできた曲が、この曲かも知れませんね。いや〜、たったそれだけのアイデアで、一体いくら稼いだんだろう？　あっ、お金の話は、この場では御法度！

推奨音源

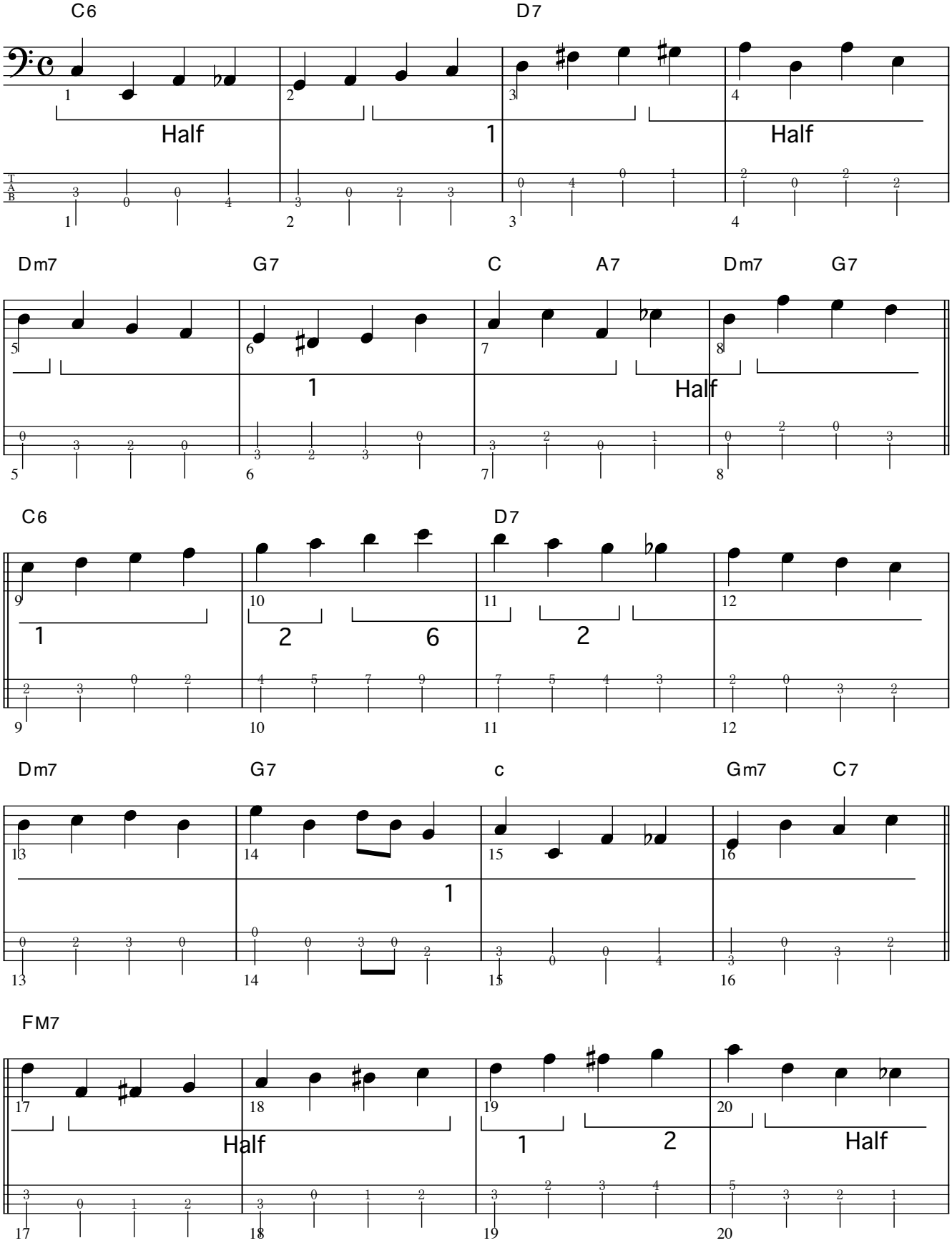
Echoes Of An Era/Chaka Khan

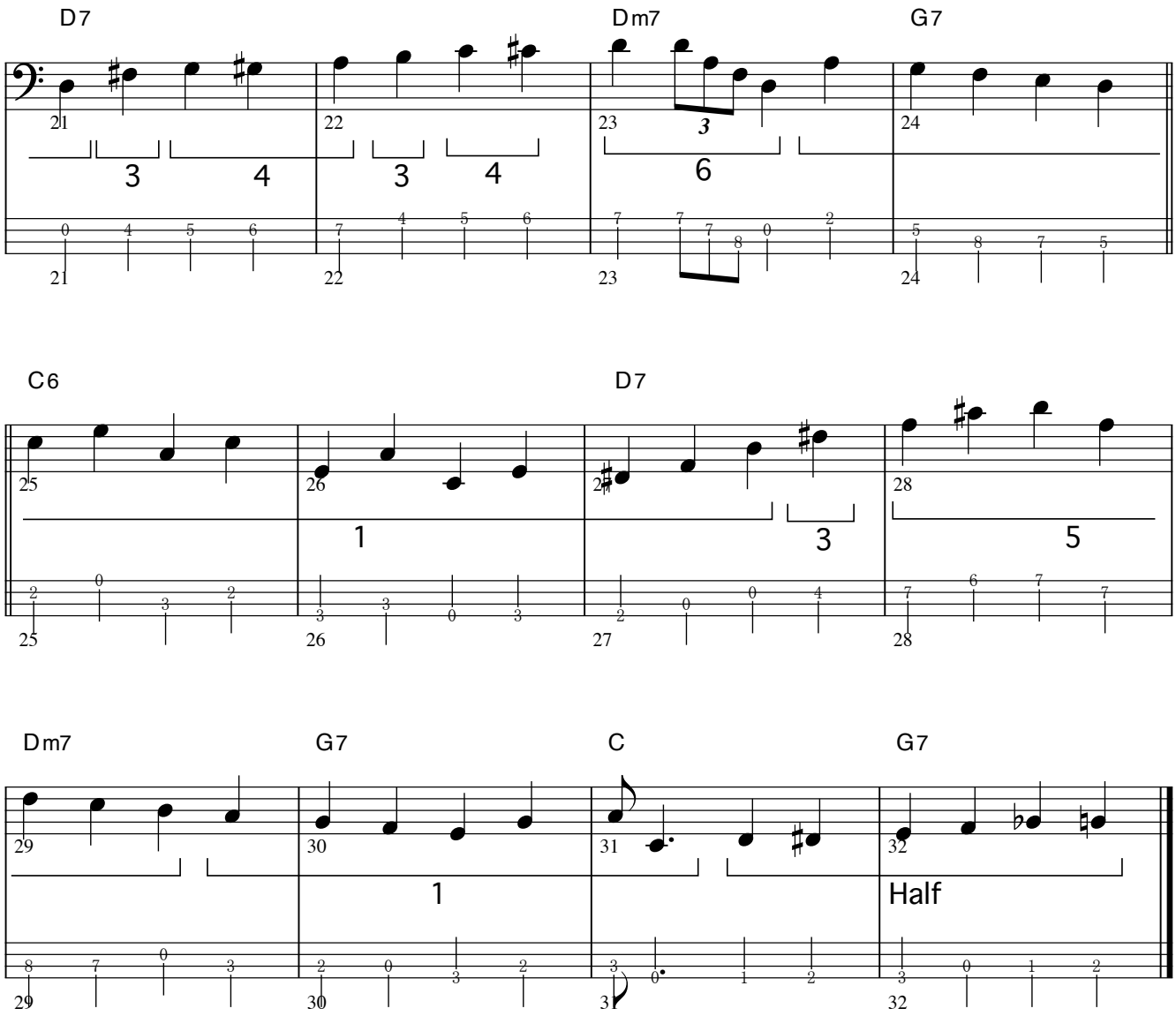
単なる歌判のアルバムと思うなかれ。まずサポートメンバーが凄い面々。スタンリー・クラークも強力なグルーブとソロを聞かせてくれます。そのサポート陣に全く

負けていないのがチャカ・カーンのスキャット。またチック・コリアのホーンアレンジも素晴らしい！ A Train 以外にもおもしろスタンダードが一杯収録されています。

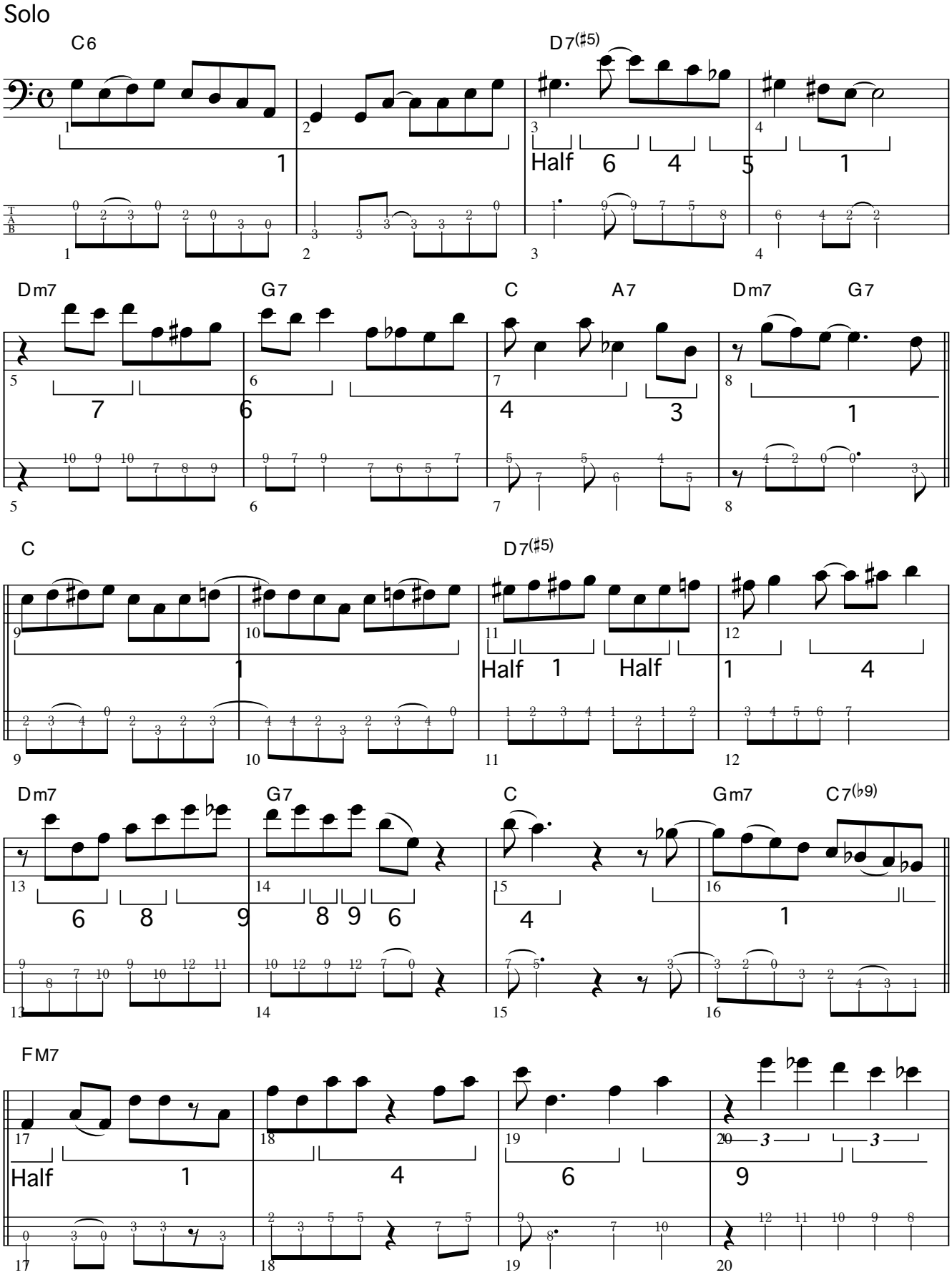
Take The A Train

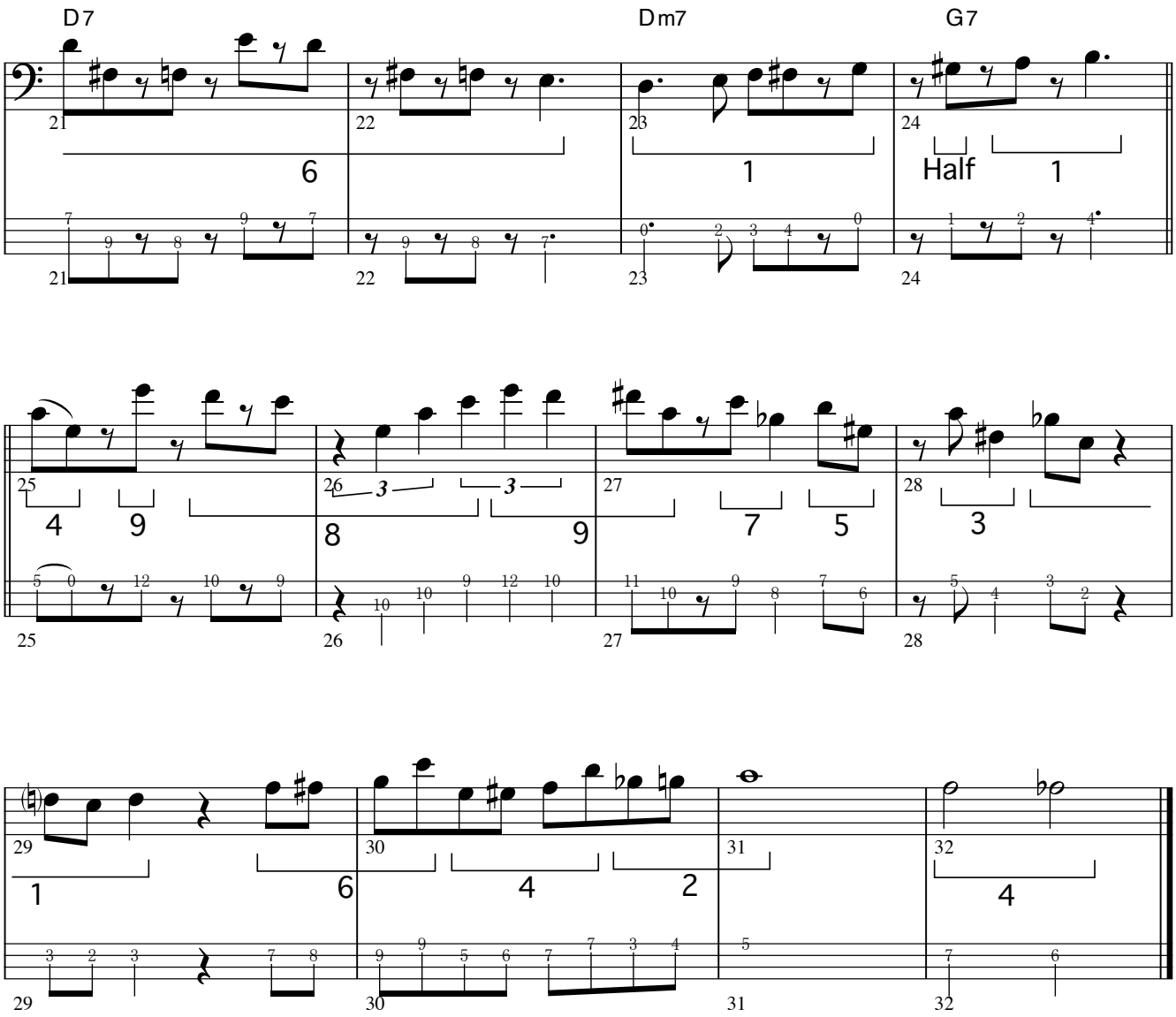
Line




D7
Dm7
G7
C6
D7
Dm7
G7
C
G7
Half

Take The A Train




D7
Dm7
G7
Half
1